

基調講演

「地域資源による島おこし、地域の活性化」

惠原 義之 氏(関東学院大学非常勤講師)

(商品・サービスを消費者に売るために考えるべきこととして) マーケティングの4Pがある。Product(製品)、Price(価格)、Place(流通)、Promotion(販売促進)が、消費者を取り巻く4つのPである。地域の特産品を売るためには、「高級感(クオリティ)」「本物」「独自性」「ユニーク」「安全性」「優越性」「先端性」が求められ、これらが効率よく伝わるには、Target(絞り込み)、Segmentation(分類)、Positioning(位置づけ)のTSP技法が用いられます。これらを(地域資源による島おこしの)ひとつの参考にしていただければと思います。



パネルディスカッション

「沖永良部島シマの宝(地域資源)を活かす」

(敬称略)

コーディネーター 花井 恒三(元奄美群島広域事務組合事務局長)

パネリスト

川村 晃司・惠原 義之

先田 光演(えらぶ郷土研究会会長)

山下 芳也(沖永良部ウミガメネットワーク代表)

宗村 好信(知名町青年連絡協議会会長)

清水 恵子(損害保険(有)清水代理店業務)

(花井) 沖永良部のこれからを考えたとき、島の中だけでどうするかというのではなく、40年後の復帰100周年に向けて、沖永良部をほかの地域とどのようにコラボレーションさせていくが必要になってくるとは思います。皆さんの意見をお聞かせください。(先田) さきほど川村さんから



花井 恒三 氏

(山下) 沖洲会の1世、2世の方の中には、島を知らない子供たちを島に行かせて、(島の文化や伝統を)体験させたいという意見が多々ありますので、その受け入れが必要に



山下 芳也 氏

交付金の話があり、今後は、交付金の使い途が問題になりま。歴史を考える意味で、沖永良部で売れるものが2つある。1つは西郷隆盛さんです。西郷さんの人間性がまだ日本中に生きていけるとすれば、打って出る力があるのではないでしようか。もう1つは、(和泊町で行っている)「結い」で地域おこしをする取り組みを行うとき沖洲会が役に立つのではないでしようか。



先田 光演 氏

(宗村) 3年前に奄美豪雨災害で住用村で土砂崩れがあったとき、その現場に駆けつけたのがほかの地域の青年団の仲間でありました。そのことがきっかけで郡内全市町村が加盟する奄美青年連絡協議会が発足しました。そして今年、復帰60周年を迎えたことから、奄美パークで青年団主催のイベントを実施しました。そこには日本を代表するアーティストが参加したり、各青年団による余興などがあつたりしました。このことで、奄美群島



宗村 好信 氏

なつてくると思います。(現在、私は)沖永良部島エコツーリズム推進協議会の会長をしています。が、よく奄美大島本島から、沖永良部島はその下部組織だと思われていることがある。これから先(島独自の取り組みを行っていくとした場合)大事となつてくることは、沖永良部島の島民としてのプライドを持つことと、外から来る甘えた考えをはねつける強い力が必要になつてくると思います。

(清水) 現在、私は詩吟の講座を受講していますが、元気な町づくりのヒントに詩吟があると考えています。姿勢を正しおなかから声を出すということは非常に気持ちのいいことです。ほかの受講生もとても明るい表情で受講しています。これから10年後を考えるときに、子供たちの教育はどうなつていくのでしょうか。しっかりと声を出し、日本語を正しく使えているでしようか。漢字を使えないと日本の文化は伝わっていかないと思います。また、私たち詩吟を行っている者としては、復帰した月である12月に、毎年、子供たちに「日本復帰の歌」を季節の歌として、教えていくことができますのではと考えています。詩吟をとおして日本復帰70周年への取り組みを行い、あわせて島の発展にも活かしていきたいと思っています。



清水 恵子 氏

が一つになつてがんばろうというきっかけづくりができました。